

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32635

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12200

研究課題名（和文）中国仏教における仏土の本質をめぐる浄穢の議論に関する研究

研究課題名（英文）The Coexistence of Purity and Impurity in Buddha-lands in Chinese Buddhism

研究代表者

工藤 量導（クドウリョウドウ）（Kudo, Ryodo）

大正大学・仏教学部・非常勤講師

研究者番号：60624674

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）：東晋代から南北朝期における中国仏教の文献では、羅什が訳出した『維摩経』や『法華経』の経説をめぐる解釈、すなわち何故ゆえに浄土と穢土が同一の場所・空間において共存が可能であるのかという議論の理論的解明が重要なテーマとなっていた。本研究ではこれを「浄穢の議論」と呼び、その思想展開史の全体像を描き出すことを目的とした。

先行研究では浄穢の議論が東晋代の釈道安の『浄土論』に淵源するとされてきたが、実は『浄土論』の著者は北周代に活躍した同名異人の道安である。そこで本研究ではこの議論の勃興期を新たに改定し直し、東晋代から唐代初期における仏教文献を総覧して思想史の再構築を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

浄土の本質的な価値をはかる代表的な基準として仏土論があり、中国や日本ではそれによって優劣のランクが判定された。ただし、仏土論は特定の浄土のある一時点の状態を暫定的に定義する場合（例えば往生思想の浄土）には有効だが、浄土が常に固定的な状態を保っているとは限らず、修行者の実践との同期連動や娑婆世界との位置関係などを十分に説明できていない。

一方、浄穢の議論は『法華経』や『維摩経』などの諸仏浄土を含む広義の浄土教に通用する学説であり、それゆえに多様な浄土教思想を俯瞰的に整理し結びつける可能性をもつ。優劣論にとどまらない建設的な視座を提供し、東アジア仏教の浄土思想の捉え方に再考を促すことが期待される。

研究成果の概要（英文）：In the Literature in Chinese Buddhism from the Eastern Jin dynasty(東晋) until the Northern and Southern dynasties period, it was an important argument why purity and impurity could co-exist in Buddha-lands, based on the theory of the Saddharmapundarikasutra(法華経) and the Vimarakirtinirdesa(維摩経) translated by Kumarajiva. I call this argument "The Coexistence of Purity and Impurity in Buddha-lands", and the purpose of this study is to outline the concept throughout its development history.

In previous studies, it has been considered this argument is originated from Tao-an's(道安) Jingtu lun(浄土論) in the Eastern Jin dynasty. But in fact, the author is a different person of the same name lived in the Northern Zhou Dynasty(北周). Therefore, in the present study, the starting period of the argument was newly revised, and tried to reconstruct throughout its development history by reviewing most of the Chinese Buddhism literature from the Eastern Jin dynasty until Early Tang dynasty.

研究分野：中国仏教

キーワード：浄穢 同質異見 慧影 大智度論疏 道安 浄土論 羽二七一 靈山浄土

1. 研究開始当初の背景

淨穢の議論とは、同一の場所・空間内において、浄や穢など複数の異なる性質の現象（浄土や穢土の顕現）が互いに妨げ合わずに共存することができるのはなぜかという論点を基軸にして、認識主体の側の仏土を見る能力（見）と客体の側の仏土の様態（質）の関係性を、たとえば「同質異見・異質異見・同質同見・異質同見」といった成句（四句分別）を用いて説明するものである。多様な諸仏国土のあり様を包括的に整理した、往生思想に限定されない広義の浄土教思想といえる。後述するように、東晋代以降の多数の仏教者がこの議論に言及するが、先行研究において、本テーマに専論するものは皆無で、部分的・概説的な論述がわずかになされるのみであった。

従来、この議論の端緒とされてきたのは、道安『浄土論』（逸文のみで現存しない）に説かれたとされる淨穢に関する三句、すなわち「一質不成」「異質不成」「無質不成」に始まる難解な成句である。この三句は慧影『大智度論疏』、道綽『安樂集』、懷感『群疑論』のほか、後代の澄観や延寿に引用され、中国仏教の概説書においても浄土の本質を示す金言として珍重されてきた。

しかし、報告者の研究によれば、『浄土論』の著者は通説とされてきた東晋の道安（312-385）ではなく、『大智度論』講説者として高名な北周の道安（-580 年頃）である。そして、道安の三句を紹介する最古の文献は、師である道安の講説をまとめた慧影（-600）『大智度論疏』となる。そのため中国仏教における浄穢の議論はこの点を踏まえた思想史の再構築が必須となった。

2. 研究の目的

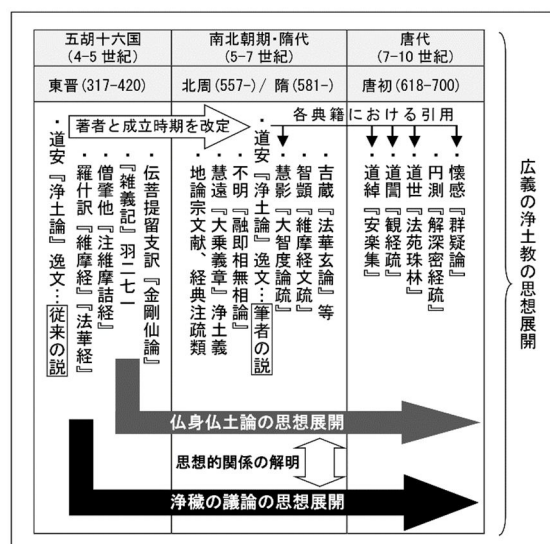
本研究は次の二点の解明を目的とする。

(1) 『大智度論疏』『浄土論』の位置付け

先行研究では道安『浄土論』を羅什以前の東晋代の文献として扱い、その時点から淨穢の議論が開始すると考えられてきた(【図1】参照)。これは道安の三句を引用する慧影『大智度論疏』に対する基礎研究の不足が要因であるため、本研究では『大智度論疏』および『浄土論』を重点的に研究してその位置付けを明らかにし、議論の基点を確かなものとする。

(2) 浄穢の議論の思想的意義

淨穢の議論の勃興期を羅什訳『維摩經』『法華經』以後の思想展開に改定し、東晋代から隋唐代の諸典籍に記述される淨穢の議論を蒐集してその思想展開を素描し、あわせて仏身仏土論を補完する役割としての思想的意義を明らかにする。



【図 1】 浄穢の議論の思想展開に関わる諸典籍

3. 研究の方法

まず、研究の目的(1)を達成するために、慧影『大智度論疏』における道安『浄土論』の引用部分に関する現代語訳を作成し、さらに『浄土論』以前に成立したと考えられる『注維摩詰経』、『雑義記』羽 271、『金剛仙論』からの思想的な流れを考察することで、道安・慧影の論述内容が南北朝期の教理学に根差していることを検討する。すなわち、淨穢の議論の思想展開史というアプローチから『浄土論』の著者が北周の道安にふさわしいことを確定する試みである。

次に、研究の目的(2)を達成するために、淨穢の議論にふれる南北朝期から隋唐代の文献を調査することによって思想展開史の全体像を描き出す。具体的な文献をおおよそその成立年代順に並べ、かつ影響力の大きい訳経者ごとに区切ってみると次の通りである。

- 羅什訳… 僧肇等『注維摩詰經』、『雜義記』羽 271
 · 菩提流支訳… 伝菩提留支訳『金剛仙論』、不明『融即相無相論』、道安『淨土論』、
 慧影『大智度論疏』
 · 真諦訳… 慧遠『大乘義章』、『淨土義』、智顗『維摩經文疏』、吉蔵『法華玄論』、同『法
 華義疏』、同『華嚴遊意』、同『觀經義疏』、同『淨名玄論』、同『維摩經義
 疏』、道綽『安樂集』
 · 玄奘訳… 道闇『觀經疏』、道世『法苑珠林』、懷感『群疑論』、円測『解深密經疏』

なお、これらの文献を調査する際、第一に慧遠・智顗・吉蔵による各著書のみならず、同時代の地論宗文献なども絶えず参照することで南北朝期から隋唐代における思想史的な発展を明らかにし、第二に同時期に思想発展を遂げる仏身仏土論との関係およびその背景となる旧訳（羅什、菩提流支、真諦）から新訳（玄奘）へと転換する訳経事業の影響についても検討する。

4. 研究成果

東晋代から唐代初までの浄穢の議論に關説する文献の要点をまとめて全体像を提示したい。

(1) 僧肇等『注維摩詰經』、『雜義記』羽 271

淨穢の議論は、羅什訳『維摩經』『法華經』の解釈をめぐり、羅什とその門下において議論されたのが発端とみられる。『注維摩詰經』(初期は単注本)には、羅什が『維摩經』の心淨土淨說と『法華經』の靈山淨土說(淨土不毀の一節)とを結びつけて、同処における淨穢共存の成立を論じていた痕跡を見出すことができる(吉蔵によれば異質同処の立場)。また、僧肇によれば土の淨穢は基本的に衆生の報いによって引き起こされているとされ、竺道生によれば仏に淨土はなく衆生のみに存在するという主張がなされ、羅什とはやや解釈を異にしている。

敦煌文献『雜義記』羽 271 は文宣王蕭子良が催した仏教サロンの議論を記録した南朝期の資料の残簡とみられ、『法華經』『維摩經』の經説を持ち出して淨穢の共存に関する議論が繰り返されている。淨穢の共存は質礙(物質が同一時に同一場所を占めえないこと)という視点から矛盾するように見えるが、片方の「我業による見」ともう一方の「彼業による見」がそれぞれの報土を得て干渉しないので、同処にして互いに妨げ合わないという。このように本格的に淨穢共存のメカニズムが議論され始めており、また報土・応土の構成による組織的な仏土論の情報を記す典籍として、管見の限りもっとも古い資料となる(羅什訳にもとづき、三身論は不成立の時期)。

(2) 伝菩提流支訳『金剛仙論』、不明『融即相無相論』

菩提流支の講義録とされる『金剛仙論』は、淨穢同処の説について、昔来より議論された「一質異見の義」(僧肇の説とされる)と違い、淨穢二土は本来的に異なることがないとして、結論的に一質異見の立場を強く批判する。なお、「一質異見」という四字一句による定義は現時点の資料では『金剛仙論』が初出である(文献の時点では四字一句の語は用いられていない)。

『融即相無相論』は隋代に成立した地論宗文献であり、煩惱即菩提や法報応三仏の相即、淨穢二土の融即が述べられている(菩提流支訳『十地經論』にもとづき、三身論は成立済の時期)。本文献においても『維摩經』と『法華經』の經説をめぐる淨穢の議論が展開されている。また「同界異見」との語句も見え、これは『金剛仙論』や地論宗関係の議論を承けて記されたものであろう。このように仏土論がより複雑化・体系化してゆく議論の延長線上に、当時における仏土論の集大成ともいえるべき、慧遠『大乘義章』『淨土義』の成立があったのではないかと推考される。

(3) 道安『淨土論』、慧影『大智度論疏』、道闇『觀經疏』、道世『法苑珠林』

慧影『大智度論疏』に引用される道安『淨土論』では、『維摩經』の心淨土淨說に加えて、摩訶男の喩えなど豊富な例を用いて、同処における「一質異見」「異質異見」の立場を論じている。淨穢の共存問題については、片側の我業に応じて感見するならば、もう一方の側は虚空となり、互いに妨げ合うようなことなく共存が可能であるとする。このような議論は『雜義記』等の「彼・我」という問題意識を継承するものであろう。また、『維摩經』の經説については、「同質異見」という立場からの解釈に疑問を呈し、「同処の異質異見」との視点で捉えるべきという理解が示されていた。思想史的に見て、は間違いなく南北朝期の資料と言ってよい。

道安『淨土論』は散逸してしまったが、複数の文献に逸文が残っている(【図1】参照)。本研究を進めてゆく中で、道世『法苑珠林』、道闇『觀經疏』に引用される五種土説はいずれも道安『淨土論』の新出逸文であることが判明した。両者に共通する西明寺という経歴を考慮すれば、ほぼ同時期の引用であるものの、『觀經疏』がやや先行すると推定される。道安『淨土論』の五種土説は、吉蔵が伝える僧叡の五種土説と内容的にほぼ一致し、おそらく『大智度論』巻32の諸仏土に淨・不淨・雜があるという説を敷衍したものである。道闇『觀經疏』は道安『淨土論』の逸文について、慧影『大智度論疏』に次ぐ情報量を有しており、とくに淨穢の三句に後続する釈文を存して淨穢二土との関連を示していること、また三界不損説に関する文章が『金剛仙論』と一致しており、『金剛仙論』から『淨土論』への影響力が大であることが明らかになった。

(4) 慧遠『大乘義章』『淨土義』

地論宗南道派の慧遠による『大乘義章』は段階的に成立し、「淨土義」の章目(第一門~第六門)は550年以前に執筆されたとみられる。第六門には「処・見」と「質・見」という2系統の四句分別(計8種)を用いた淨穢の議論が見られる。第二門では完成度の高い仏土論(事淨土・相淨土・真淨土の三土説、真応の二土説、法報応の三土説)を提示するが、その理論構造をふまえて、第五門において羅什以降の争点とされてきた仏と衆生のいずれに淨土が所属するのかという問題について、慧遠は仏と衆生の各別に淨土があるという立場を表明し、最終的に第六門において『維摩經』心淨土淨說や『法華經』靈山淨土説をめぐる淨穢の議論の解明を果たした。

慧遠が提示する四句分別は、『金剛仙論』を嚆矢として散見され始める「一質異見」などの四字一句を用いた議論を発展させたものであり、後の智顗『維摩經文疏』や吉蔵の各著書に見られる四句分別の導入に大きな影響を与えたとみられる。なお、智顗や吉蔵とは異なり、慧遠の「淨土義」の時点では真諦訳『攝大乘論釈』の影響はみられない。

(5) 智顗『維摩經文疏』

天台智顗の『維摩經文疏』では「質・見」「障礙の色・障礙の見」「質礙の色・質礙の見」という3系統の四句分別(計12種)が説かれる。先行研究では、慧遠『大乘義章』から智顗『維摩經文疏』への影響(とくに四土説)が大きいとされていたが、引用經論や仏国土の名称、四句分別などをつづさに検討した結果、『大乘義章』の章目や四句分別などを形式的には取り入れて

いるものの、内容的には智顗独自の教学思想（四土と四教の関連）が展開されている部分がほとんどであると判明した。四句分別についても、『大乘義章』が諸浄土の客観的な整理を目的としたのに比して、『維摩經文疏』は無質礙たる常寂光土を頂点とし、その所見を達成するための、より修道的な観点から論述されたものであり、両者の問題意識は大きく異なっている。

(6) ～ 吉蔵『法華玄論』『法華義疏』『華嚴遊意』『觀經義疏』『浄名玄論』『維摩經義疏』

三論宗の吉蔵の名著書は、浄穢の議論に關説するいずれの文献よりも内容が充実している。それは初期の著書『法華玄論』の頃から顕著であり、吉蔵は議論の端緒が羅什およびその門下にあったことを明記している。中期の著作『華嚴遊意』は、師である法朗の影響もあって四句分別の徹底的な整理がなされ、三論教学の伝統説（初章義、中仮義、四種釈義）を基盤としながら、実に19系統もの四句分別（計76種類）が示され、決定版ともいえる内容をほこる。ただし、『華嚴遊意』の論述構造はなぜか後期著作～にはほとんど継承されず、その理由を明らかにすることは今後の課題としたい。なお、諸著作を検討する中で、従来は成立時期が不明とされていた『觀經義疏』について、少なくとも『華嚴遊意』以後、おそらく合計十句の仏土説を提示する最初の文献『浄名玄論』を経て後の、長安在住時（599-）に撰述されたと推定した。

(7) 道綽『安樂集』、懷感『群疑論』、円測『解深密經疏』

道綽の『安樂集』における浄穢の三句の引用（道安『浄土論』）を検討した結果、道綽は浄穢の議論の難解さを認識したうえで『浄土論』を引用することから、おそらく引用文以外の周辺情報を知り得ていたとみられ、六大徳相承説に挙げられる道場法師などの智度論研究者の關係筋から『浄土論』との接点があったと想定した。また、先行研究で意見が割れている『安樂集』と『無量寿觀經續述』の成立前後について、『安樂集』が上述の議論の趣旨をふまえた論述がなされているのに対して、『續述』はそれを参照しながらも一部の論点が抜け落ちたままで独自の論を展開していたことを明らかにした。すなわち、『安樂集』の方が先に成立したと考えられる。

懷感の『群疑論』における浄穢の三句の引用（『安樂集』とほぼ同文）では、著者を東晋の道安と誤認したうえで、浄穢の三句の達意的解釈を称賛する一方、三句のうちの「異質不成」の句については、懷感が学んだ玄奘の唯識教理に照らし合わせれば間違った解釈であるという。なお、懷感の著者誤認は『浄土論』の情報を断片的にしか知らないことに起因し、おそらく「安法師」との著者名を記載する道暲『觀經疏』を参照して判断した可能性が高い。

円測の『解深密經疏』における四句分別は、玄奘訳『仏地經論』にみられる「成所作智、若作化身、亦令衆生一質異見、利樂事成」という文言を解説したものである。懷感は『仏地經論』の当該部分を引用していないが、新訳經論を受容した一定層（道暲、道世、円測、懷感）がこぞってこの問題を取り上げて、唐代初期に一時的な再流行をみせるのは、『仏地經論』に「一質異見」という語句を含む一節が存在していることに起因し、唯識教理を通じた合理的な解説が必要になったからではないかと考えられる。

以上の(1)～(7)の内容について学会発表および論文投稿を通じて研究成果の公開につとめた。

(8) 本研究の位置づけと今後の課題

本研究の位置づけ（資料的意義・思想的意義・訳経論的意義）および今後の課題を以下に示す。

資料的意義…慧影『大智度論疏』は『大智度論』の唯一の注釈書かつ地論宗研究の一端を担う希少な資料であり、従来の研究では大智度論学者という慧影の事績が紹介されるにとどまっていたが、本研究において道安『浄土論』の引用文および慧影の釈文を検討することで、南北朝期の資料としての位置づけを明確にした。道安『浄土論』についても、『觀經疏』、『法苑珠林』における引用文を道安の学説として確定することで、新出逸文として紹介することができた。なお、慧影『大智度論疏』の全般的な基礎研究については今後の課題としたい。

思想的意義…仏身仏土論が本格的に整うのは、曇鸞以後、南北朝期の地論宗の学僧たちの手によるもので、慧遠の頃におおよそその議論がまとめられたとみられる。本研究によって、浄穢の議論はそれに先駆けて活発化していたこと、さらには仏身仏土論の発生・形成と深く関わる学説であることが判明した。とくに『雜義記』の中に慧遠の学説よりも古い、原初的な仏土論の記述があることを発見し、それを浄穢の議論の思想史の一端に位置づけることができたのは大きな成果である。なお、これら広義の浄土教思想は阿弥陀仏の往生思想とほぼ無関係に発生・展開したことも興味深い。研究によって着眼点を得られた「仏土論の源流を明らかにする」という課題については、『雜義記』の思想史的な位置づけを精査することであらためて検討を期したい。

訳経論的意義…浄穢の議論は羅什訳『法華經』心浄土浄説、『維摩經』靈山浄土説の異釈をめぐって勃発したものであり、その後、菩提流支等の訳経論にもとづく地論宗文献において議論された三身三土論と思想的な合流をみせ、真谛訳『摂大乘論釈』の受容が始まった後も、吉蔵の諸著作に顕著なように、羅什および門下による浄穢の議論は参照され続けた。唐代初期にはやや影響力に陰りを見せたが、玄奘訳『仏地經論』の文言を解釈するにあたって一時的なりバイバルを見せ、やがて終息した。その後は、当初の論点や思想史とは断絶する形で、道安『浄土論』の浄穢の三句がほぼ単独で引用され、浄土の本質を示す金言として散発的に利用されていった。俯瞰的にみれば、浄穢の議論とは羅什訳経論にもとづいて生じた一学説の発生・展開・収束を示す内容であり、後に中国仏教独自の浄土教思想を生み出す素地を形成するものであったといえる。この点を仏身仏土論の発生・展開とともにより詳細に追究することを今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 工藤量導	4. 巻 69(1)
2. 論文標題 吉蔵における淨穢の議論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 218-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.69.1_218	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 工藤量導	4. 巻 68-1
2. 論文標題 智顗『維摩經文疏』における淨穢の議論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 168-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.68.1_168	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 工藤量導	4. 巻 60
2. 論文標題 中国仏教における仏土の本質をめぐる淨穢の議論 慧影『大智度論疏』および道安『浄土論』を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 仏教学	6. 最初と最後の頁 47～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤量導	4. 巻 67-2
2. 論文標題 浄影寺慧遠『大乘義章』「浄土義」に説かれる淨穢の議論について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 771-776
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.67.2_771	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 工藤量導	4. 巻 58
2. 論文標題 道安『浄土論』の新出逸文と浄穢の議論 道世『法苑珠林』と道闇『観経疏』の検討を通じて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 浄土学	6. 最初と最後の頁 53-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 工藤量導
2. 発表標題 吉蔵における浄穢における議論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会 第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 工藤量導
2. 発表標題 中国隋代における仏土の本質をめぐる浄穢の議論 天台智顗『維摩経文疏』「釈仏国品」を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤量導
2. 発表標題 智顗『維摩経文疏』の仏土説について 浄影寺慧遠『大乘義章』との比較を通じて
3. 学会等名 仏教文化学会
4. 発表年 2019年

1．発表者名 工藤量導
2．発表標題 中国仏教における仏土の本質をめぐる浄穢の議論 慧影『大智度論疏』および道安『浄土論』を中心として
3．学会等名 仏教思想学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 工藤量導
2．発表標題 中国仏教における仏土の本質をめぐる浄穢の議論 浄影寺慧遠『大乘義章』「浄土義」を中心に
3．学会等名 日本印度学仏教学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 工藤量導
2．発表標題 中国仏教における仏土の本質をめぐる浄穢の議論 浄影寺慧遠『大乘義章』「浄土義」の教学背景
3．学会等名 浄土宗総合学術大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 工藤量導
2．発表標題 中国浄土教における浄穢の議論 道安『浄土論』の逸文について
3．学会等名 浄土学研究会学術大会
4．発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------